

この命が消えたとしても、  
きみの笑顔は忘れない

水瀬さら Sara Minase



アルファポリス文庫

プロローグ

いやー、やっぱり自撮りって恥ずかしいね。  
でも最後だから、ちゃんと顔出して言うよ。

「おれは芹澤奈央せりぞわなおさんが、大好きです」

## 第一章 死にたかつたんでしょ？

ああ、今日も目覚めてしまった。

薄っぺらい布団の上で、重い体をゆっくりと起こす。

狭い部屋の小さな窓からは、頼りない朝陽が差し込んでくる。

このまま、目覚めなくてもよかつたのに。

また今日も一日、わたしは生きなきゃいけなくなつた。

小さく息を吐き、布団を片付け、制服に着替える。

伸ばしっぱなしの長い髪を簡単に整え、通学用のバッグを持って部屋を出た。

「おはようございます」

キッチンで食事の支度をしている叔母さんに挨拶する。返事はない。

ダイニングテーブルには、わたしを除いた三人分の朝食が用意されている。

叔父さんはそのテーブルで、すでに食事をしていた。

コーヒーとトーストの香りが鼻孔をくすぐり、お腹が音を立てそうになる。そういえば昨日の夜は食費が足りなくて、なにも食べていなかったんだ。テーブルの上には千円札が一枚置いてある。わたしの数回分の食費だ。それをもらってお礼を言う。

「ありがとうございます」

やはり叔母さんは返事をしない。

叔父さんは無言で新聞を広げ、さりげなく顔を隠した。

従妹の恵麻いづまは洗面所で、ドライヤーを使っているようだ。

肩にかけてたバッグの持ち手をぎゅっと握ると、わたしはもう一度つぶやいた。

「行ってきます」

背中を向けて、キッチンをあとにする。叔母さんが面倒くさそうにため息をつく。

そのため息が「早く出ていけ」と言っているように聞こえてしまう。

速足で洗面所の前を通り過ぎた。

恵麻はスマホでお気に入りの曲を流しながら、鼻歌まじりで髪をセットしている。

この家にわたしの居場所はない。

わたしを見てくれる人は誰もいない。

玄関を開け、外へ出た。自転車にまたがり、ぐつと強くペダルを踏み込む。

眩しい日差しに眉をひそめながら、風を切って走った。

いつもと同じ朝。いつもと同じ通学路。

消えてしまいたいと思っっているのに、今日も学校へ向かっている。

結局わたしはどこへも行けず、自分の心を殺して、生きたくない一日を生きるしかないんだ。

\*

カシヤツ——

高校に入学して約一か月。普段と変わらない、にぎやかな五月の朝の昇降口。

かすかなシヤッター音に振り向くと、スマホを片手に立っている男子生徒の姿が見えた。

わたしが顔をしかめたら、スマホを下に下ろし、にかつと笑う。

「芹澤さん！ おはよう！」

同じクラスの、渋谷春輝。

すらりと細身で背が高く、柔らかそうな茶色い髪。くつきりした二重の大きな目に、長いまつげ。鼻も唇も形よく、笑うと頬にえくぼができて、その人懐っこい笑顔が可愛いと女子生徒に人気だ。

おまけに物怖じしない明るい性格のため、男子生徒からも親しまれている。

わたしはその顔から視線をそむけ、黙って廊下を歩き出す。だけど春輝はわたしのあとを、しっぽを振る子犬のようについてくる。

「待ってよ、芹澤さん！」

「ついてこないで」

「ついてこないでって言われてもなあ……おれたち同じ教室行くんだし」

さらに顔をしかめて隣を見る。

すかさず春輝が掲げたスマホから、カシヤツと歯切れのいいシヤッター音が響いた。

「ちよっ、やめてよ！」

「いいね、芹澤さんの怒った顔も」

手を伸ばし、スマホをひったくろうとしたら、避けるように高く上げられた。「くっ……」  
悔しい。わたしの身長はそんなに低いほうじゃないけど、それでも春輝の手には届かない。

そんなわたしをからかうように、春輝はさらに高く天井に向けて手を伸ばす。

「悪いけどこれ、芹澤さんの写真がいっぱい保存されてる大事なスマホだから」

「勝手に撮るのやめてよね！ それって盗撮でしょ！」

「じゃあこれからは『撮るよ』って言ってから撮る」

へらっと笑った春輝の髪に窓から差し込む朝陽が当たり、キラキラ輝いて見える。

まるでスポットライトを浴びたアイドルみたい。

この茶色い髪は地毛なのか、それとも染めているんだろうか……なんて、どうでもいいことが頭をよぎる。

「芹澤さん、撮るよ！」

ハッと気づいた瞬間、シャッター音が響いた。

「やめてって言ったでしょ！」

「だから、ちゃんと『撮るよ』って言ったし」

春輝はスマホの画面を見ると、「わっ」と叫んで目を輝かせた。

「見て！ この芹澤さん、めっちゃ可愛い！ スポットライト浴びたアイドルみたい！」

目の前に突き付けられたスマホの画面。そこにはむすっとした顔のわたしが写っている。

なにこれ。これのどこが可愛いのよ？ バカじゃない？

そう言い返そうとしたとき、春輝の視線がスマホからわたしに移る。

「でもほんとはおれ……」

目が合う。まっすぐに春輝がわたしを見る。

「芹澤さんの笑顔が見たいんだよなあ……」

きゅっと胸に痛みが走った。

『奈央の笑顔は可愛いよ』

耳に聞こえるのは、お母さんの甘ったるい声。

右手で制服のスカートを強く握りしめたとき、廊下をバタバタと走ってくる足音が

近づいてきた。

「春輝ー！」

「おはよー」

駆け寄ってきたのは数人の女子生徒だ。みんな髪の色が明るくて、スカートが短い。いわゆる陽キャといわれるグループの子たちだ。

「ああ、おはよ」

それでもちろん春輝も、そのグループの一員である。

「なにやってんの？ こんなところで」

一番目立っている女子、美鈴みすずがそう言っ、そばに立つわたしを見る。春輝に向けていたのは正反対の、ひどく冷たい視線で。

「写真撮ってたんだよ。芹澤さんの」

「はあ？ 写真？」

「なんで芹澤さんの？」

別の女の子がくすつと笑う。

「たしかに芹澤さんって、顔だけは美人だけど……」

笑い声が広がっていく。困惑した顔で春輝が周囲を見まわす。わたしは唇を噛みしめると、背中を向けて速足で歩き出した。

「あ、ちょっと待ってよ、芹澤さん！」

「いいじゃん、春輝。あんな人、ほっときなよ」

「あたしらが声かけてあげても、嫌な顔しかしないし」

「わたしに話しかけないでって感じでさあ」

「ちょっと見た目がいいからって、何様のつもりよ」

春輝の声をかき消すように、女の子たちの言葉が響き渡る。

全部、聞こえるんですけど。いや、聞こえるように言ってるのか。

わたしは振り向かず、教室を目指して進む。

女の子たちに囲まれていた春輝は、もう追いかけてこなかった。

ひとり教室に入り、窓際の席に座ると、スマホの画面を見下ろした。

画面には【小説コンテラスト結果発表】という文字。

わたしは毎晩寝る前に、胸にたまった悔しさや苦しさを日記のように書き殴って

いた。

たぶん……現実逃避したかったんだと思う。

そんなひとりよがりな、心の叫びのようなものは、日が経つにつれ文字数が膨らんでいった。

ある日、偶然見つけたこのコンテストに、なんとなく送ってみたのだ。

指先で、画面をスクロールして結果を見る。

結果は——落選。

「当たり前か……」

別にいい。あんなの物語とも言えないし。特に小説に興味あるわけでもないし。

でも——だったらなんで、応募したりしたんだろう。

小さくため息をついてから、結果発表の画面を閉じる。それから耳にイヤホンをつけ、適当に曲を流した。朝や休み時間はこうやって、周りの音や声を遮断している。

この教室で、わたしはいつもひとり。友達と呼べる人はいない。

だからといって、特に問題はない。わたしは自分の意志で、周りの人間を寄せつけないようにしているんだから。

友達なんかいらぬ。楽しい学校生活なんて必要ない。行く場所がないから、ここで時間を消化しているだけ。

でもこのままだと、今日も明日も、たぶんその先もずっと、こんな毎日が続くのだ。こんな——生きていく意味もない、苦しいだけの毎日が……

また胸が痛み、下を向くと、そっと誰かに肩を揺らされた。

「芹澤さん」

頬杖をついたまま、片手でイヤホンをはずす。顔を上げると、春輝がわたしを見下ろしていた。

わたしはすっと視線をそむける。

「わ、無視かよ！ ひどっ！」

うるさい、あっち行って。陽キャグループのあんたが、ほっちのわたしに声をかけたりしたら、にらまれるのはわたしなんだよ？

「おい、芹澤さーん」

のん気なその声を無視すると、イヤホンをつけ直して窓の外を見つめ続ける。

「撮るよ」

少し大きな声にハッとした瞬間、スマホのシャッター音が鳴り響いた。  
「ちよっ……」

振り向いたわたしを、春輝がにやにや見下ろしている。そしてスマホの画面を確認して、「おっっ！」と大きな声を上げた。

「ヤバイね、これ。芹澤さんの横顔。すっげー、綺麗」

綺麗……

『奈央はね、ママに似て綺麗なんだから。もっと自信持っていいたよ？』

再び頭に響く甘ったるい声を、急いで追い払う。

春輝がスマホの画面をこちらに向けた。

柔らかな光に包まれる、わたしの横顔が写っている。

「な？ 超綺麗だろ？」

もう一度イヤホンをはずすと、手を伸ばしてスマホを奪った。そしてその写真を迷わず消去する。

「わっ！ なにすんだよ！」

見ると他にもたくさん、わたしの写真が保存されている。

いつの間にこんなに撮ったんだ。腹が立つ。

「だめだよ。これはおれの宝物なんだから」

春輝の手が伸び、スマホを取り返した。それから大事なものを持つように、スマホをそっと握りしめる。その姿に、唇を噛んだ。

「……おかしいよ」

「え？」

「わたしの写真なんか撮って、なにが楽しいの？」

すると春輝がにこっと笑った。女の子に人気のある、あのアイドルっぽい笑顔だ。

「そりゃ、楽しいよ。おれ、モデルは芹澤さんって決めてるんだ」

わたしは思いつき顔をしかめた。

「やっぱりおかしい」

「そうかなあ。おれ、いたって真面目なんだけど」

そう言って春輝が、あははっと笑う。にぎやかな教室に、春輝の明るい笑い声が響く。

でもその向こうで美鈴たちが、こっちに冷たい視線を送っているのが見えた。

「もうあっち行ってよ。みんなに愛に思われる」

「え、でもおれ、芹澤さんと話したいし」

「わたしは話したくない」

きつぱりと断ったのに、春輝はまだそこにいる。わたしは顔をそむけて、再びイヤホンをつけた。

しかし一度音楽を止めたことで、イヤホン越しでも春輝の次の声は届いてしまった。「じゃあ放課後ならいい？」

ゆっくりと首を動かした。にこにこ笑っている春輝の顔が見える。

「今日一緒に帰ろう」

それだけ告げると、春輝はみんなのほうへ戻っていった。わたしは呆然と背中を見送る。

『今日一緒に帰ろう』

その言葉が、じんわりと胸に沁み込む。

だけどそれを振り払うように、首を横に振った。

バカじゃないの？ 帰るわけないじゃん。

ほっちのわたしが人気者のあんたとなんか、帰れるわけない。

\*

いまから一か月ほど前。高校の入学式の日から、春輝は変なやつだった。

体育館で式が行われたあと、校庭の桜の下で集合写真を撮るため、新入生は昇降口前の広場で待機していた。

両親や中学時代の友人と、楽しそうにおしゃべりしたり、写真を撮り合ったりしている生徒たち。にぎやかで暗れやかな雰囲気の中、わたしはひとりぼっちでいた。

別に寂しくなんかない。ただ居場所がなくて、落ち着かなくて、なんとなく周りを見まわしてみた。

そんなわたしと目が合ったのが、春輝だ。

まだ慣れない制服姿の春輝は、わたしと同じようにひとりでそこにいた。親も、友達も、そばには誰もいなかった。

わたしはすっと目をそらす。

ひとりぼっちの生徒は、わたしたちだけじゃない。親と別行動の人だっているし、同じ中学出身の生徒が少なく、友達がいらない人だっている。

だから別に珍しいことじゃない。

それなのにわたしはなんだか気になって、もう一度春輝のほうを見てしまったんだ。すると春輝はやっぱりこっちを見ていて——わたしたちの視線が、もう一度ぶつかった。

なんで？

わたしはさっと顔をそむける。

なんでまだこっちを見ているの？　もしかしてわたしの知っている人？　同じ中学にあんな人いたっけ？

「それでは一年三組の生徒の皆さん。こちらに集合してください」

先生の声に、みんながざわざわと動き出す。わたしもその流れに沿って、歩きはじめる。

そのときほんつと肩を叩かれた。びくつと背中を震わせ、振り返る。

立っていたのは、春輝だった。

驚きすぎて声も出せないわたしをじつと見つめたあと、春輝はにかっと笑って言った。

「一年三組でしょ？」

わたしは黙ってうなづく。

「おれも。あ、おれ、渋谷春輝」

さらさらした見た目と、明るさに気おされて、わたしはこくりとうなづく。

春輝はそんなわたしに、笑顔でとんでもないことを言った。

「芹澤さんでしょ？」

「え？」

「芹澤奈央さん」

なんなの、この人。なんでわたしの名前を知っているの？

「あの……どこかで会いましたっけ？」

わたしの問いには答えず、春輝はにこにこ微笑んでいる。だんだん怖くなって、わたしは目をさまよわせつつ、もう一度聞き返した。

「えつと、なんでわたしの名前……」

「芹澤さん、汐浜中しほはまだったでしょ？」

「え、あ……」

なんて答えればいいのか迷っていたら、春輝が続けた。

「でも中三で引越すことになって、転校しちゃったよね。転校先の学校がなかなかわかんなくて、捜すの苦労したよ」

背中がぞくぞくと震えた。

なんなの、この人。わたしのこと捜したって……気持ち悪い。

「でもなんとか転校先がわかって、芹澤さんがこの高校受けるって知って、おれも頑張って受験したんだよね」

意味がわからない。わたしを追いかけてきたってこと？

だけど春輝は、のん気に笑ってわたしに言う。

「いや、マジでよかった、芹澤さんに会えて。しかも同じクラスとか、神様が味方してくれてるとしか思えない」

「い、意味がわからないんだけど……」

「わからなくていいよ。いまのところは、おれの片思いで」

片思い？ その言葉にますます困惑して、わたしは固まる。

そのとき先生の声が響いた。

「一年三組の人ー！ 早く集まってー！」

「あ、行かなきゃ」

春輝が先生のほうを見てから、わたしに言う。

「行こう、芹澤さん」

だけどわたしは春輝を無視して歩き出した。

「え、ちょっと待ってよ。芹澤さん！」

春輝がわたしの名前を呼びながらついてくる。周りの生徒たちが、ちらちらとこちらをうかがっている。彼の明るい髪色も、整った顔立ちも、誰よりも目立っているからだ。

だけどわたしは入学早々、目立ちたくなんてない。

だいたいこんな人知らないし、ストーカーみたいで気持ち悪いし、迷惑でしかない。

「おーい、芹澤さんってば！」

「もうっつ、うるさ……」

カシャツ——

振り返ったと同時に、シャッターを切る音がした。これが彼に撮られた一枚目。スマホを下ろした春輝がにかつと笑う。

「撮れた。芹澤さんの顔」

「ちよつと……なんなの？」

「ねえ、芹澤さん、おれのモデルになって」

「は？」

「これからたくさん芹澤さんの写真撮らせて」

「バ、バカじゃないの！」

怒ったわたしの前で、春輝が声を上げて笑っている。

変なやつ。ストーカーの上に、盗撮までするなんて。絶対関わらないようにしよう。

そう思ったのに——

あれから一か月間ずっと、わたしは彼に付きまとわれている。

\*

その日、授業が終わると荷物を抱え、一目散に教室を飛び出した。もちろん春輝から逃げるためだ。

だけど廊下に一歩出て、わたしは足を止めた。

「芹澤さん、ちよつといい？」

待ち構えていたのは、美鈴を中心とした陽キャグループの女子生徒たち。

わたしはため息をついて、「いいよ」と答えた。

彼女たちの言いたいことはだいたいわかる。いつかこんなことが起きるような予感もしていた。

わたしは美鈴たちに囲まれたまま、まるで連行されるように、ひと気のない空き教室へ連れていかれた。

そこで延々と、文句を言われ続けたのだ。

「……はあ」

やっと美鈴たちから解放されて、昇降口から外へ出たのは、いつもよりだいぶ遅い時間だった。

とぼとぼと自転車置き場に向かい、自分の自転車を引き出す。あの子たちに文句を言われているうちに、こんな時間になってしまった。そのおかげで、春輝には捕まらずにすんだけど。

グラウンドで声を上げている運動部を横目に、わたしは自転車を走らせた。そして頭の中で、美鈴たちに言われた言葉の数々を思い出す。

簡単に言えば、「あんたみたいな不愛想な女が、あたしたちのアイドル春輝に近づくな」というようなことだ。

……それにどうやら、美鈴は春輝のことが好きらしい。

「そんなこと、わざわざ言われなくてもわかってるって」

ひとりつぶやき、ペダルを踏む足に力を込める。

わたしだって春輝には迷惑してるんだ。

でも何度説明しても、彼女たちは納得してくれなかった。やがて反論する気もなくなって、黙って聞いていたけれど。

向かい風を受けながら、ぎゅっとハンドルを握りしめる。

もう嫌だ。すべてが面倒くさい。

やっぱり——今日、死のう。

ペダルを強く踏み込み、わたしは帰る予定の家ではない方向へ自転車を走らせた。

学校の近くはわりとにぎやかで交通量が多いが、少し自転車で走ると、すぐにのどかな田舎の風景に変わる。

いつも帰るのは畑が広がる山の方角だけど、今日のわたしは海の方角へ走っていた。ぼつぼつと民家の並ぶ狭い道を抜けたら、目の前が開けていきなり海になる。突き当りの丁字路を左に曲がり、堤防沿いの道をひたすら進む。

小ぢんまりとした漁港を横目で見ながら釣具店の前を通り過ぎると、民家もなくなり、車はもろろん人通りも少なくなる。夏なら多少は釣り人などが訪れるが、この季節はひと気がない。

寂しい道をさらに進むとトンネルが現れ、その手前に駐車場のような空き地が見えてくる。

わたしはそこでブレーキをかけた。

空き地にある堤防の向こうは、どこまでも続く広い海。

左側を見ると、狭くて急な階段がある。ここから海岸に下りられるのだ。ただこの階段を下りる人はめったにいない。海水浴場でもないし、釣りができるような場所でもないからだ。

わたしは自転車空き地に止め、古い階段をゆっくり下りはじめた。

この海岸は砂浜ではなく、ごろごろとした石や岩の浜だ。階段を下りると、海岸に迫る崖に沿って、石の上を黙々と歩いていく。

波の音がする。潮の匂いも。ここは小さいころと変わらない。

しばらく進むと、崖の岩壁を掘り進めたような狭い洞穴が見えてくる。そしてその穴の正面の、少し離れた波打ち際には、海に向かって建つ古くて小さな鳥居がある。

洞穴の中には祠ほこらがあつて、神様が祀まつられているらしい。

少し強くなつてきた海風にあおられながら、祠ほこらの前に立つ。

きつと誰からも忘れられているのだろう。手入れのされていない祠ほこらはぼろぼろになつている。

幼いころはお母さんに連れられてよく来たけれど、もうずいぶん足を運んでいな

かった。

『ここには神様がいるんだよ』

お母さんはそう言つて、祠ほこらの前でいつも手を合わせていた。わたしもその隣で同じように手を合わせた。

『お父さんが帰ってきますように』

お母さんの言葉に合せて、幼いわたしもつぶやいた。

『帰ってきますように』

お父さんは遠い町で働いていると、お母さんは教えてくれた。お仕事が忙しくて、なかなか帰ってこられないのだと。

だけどお父さんは、いつまで経つても帰ってこなかった。

成長するにつれ、さすがにわたしもおかしいと思いはじめ、祈るのをやめた。

この神様に祈つても、お父さんは帰ってこないだろうと理解してしまったのだ。

『もう神様に祈るのなんてやめなよ。きつとお父さんは、わたしたちに会いたくないんだよ』

わたしがそう言うと、お母さんは悲しそうな顔をして——それでもここに来ること

をやめなかった。

こんな、頼りにならない神様に祈ったって無駄なのに。

若々しくて少し派手だったお母さんが、ほら祠に向かつて手を合わせ、目を閉じていた姿を思い出す。

神様に、すがりつくしかなかったお母さん。現実を、見ようとしなかったお母さん。まだ幼かったわたしでさえ、子どもっぽい人だなと感じたときもある。

そんなお母さんのことを、いつしかわたしは見下すようになっていた。

『奈央はいなくならないでね？ ママのそばにずっといてね』

常に誰かに頼ることしかできず何度もそう言っていたお母さんは、わたしが中学生のとき病に侵され、あっけなく亡くなってしまった。

それからわたしは叔母のところに引き取られることになった。けれど、毎日誰とも話さないような日々が続いている。

わたしは、誰から見られない。見てくれるのは春輝ぐらいのものだけど、彼には見てほしいとも思っていない。それどころか春輝の存在によって、人生の厄介さは増してしまった。

空気のように生きていこうと思っていたのに、それすらできないのなら、もう死んだほうがいい。

目の奥がじんわりと熱くなる。

なにかがこぼれないうちに、わたしは祠ほらに背を向ける。

もう決めたんだ。

こんな世界に未練はないから。わたしがいないほうがみんな喜ぶから。

だから頼りない神様の前で死んでやる。

石を踏みしめ、鳥居に向かつて歩く。

鳥居の向こうはすぐ海だ。

波が打ち寄せ、空に海鳥が飛んでいる。潮風が吹きつけ、長く伸びた黒髪を後ろになびかせる。

わたしは古い鳥居をくぐり、足を止めた。

ここからの風景は小さいころから変わっていない。変わってしまったのはわたしの周りと、わたしだけ。

風に吹かれながら、足元を見下ろす。

海は深いだろうか。冷たいだろうか。でもここから海に入れば、この世界から消えることができる。

ローファーを脱ぎ捨て、思い切って水に足をつけた。ひやっと足首が冷える。痛い。わたしは菌を食いしぱり、もう一歩足を前に出す。

だけどその足が震えているのがわかった。

いまならまだ引き返せる。でもどこに引き返せばいいの？

わたしに帰る場所なんてない。

波が打ち寄せ、スカートにかかる。まだ一か月しか着ていない制服のスカートの紺色が、じわっと黒く変わる。

買ってくれた叔父さんと叔母さんには申し訳ないと思う。

だけどあのふたりにとつて、わたしは邪魔者だから。

わたしがいなくなれば、きつとふたりは喜ぶから。

気づけば膝まで水につかっていた。全身が冷えて、体が震える。

でももっと前に進めば、きつと楽になれる。このどうしようもない苦しさから、解放される。

一歩、また足を出す。前から波が襲いかかる。

水の塊が体につつきり、足がよろけた。ずぶんと深みにはまったのがわかる。顔が水につかると、そのまま水中に引きずり込まれそうになる。

冷たい。寒い。怖い――

途端に恐怖心でいっばいになり、気づけば声にならない声で叫んでいた。

嫌だ、助けて！ 誰か……！！

「芹澤さん！」

そのとき、わたしを呼ぶ声が聞こえた。

後ろから、ばしゃばしゃと水がはねる音。

「行くな！」

その声と同時に腕をつかまれた。ハッと顔を上げ、後ろを振り返る。

真剣な顔でわたしを見つめているのは――春輝だった。

「なん……で」

強い波が打ちつける。再びよろけたわたしの体を、春輝が支えてくれた。

「とにかく戻ろう」

力が抜けたわたしを抱えるようにして、春輝が腕で波を掻き分けて岸へ連れていく。何度も転びそうになりながらも、波打ち際にたどり着き、春輝はわたしを石の上に座らせた。

「大丈夫？」

頭の上から降りかかる優しい声。わたしはうつむいたまま、どうしたらいいのかわからない。

足が冷たくて、背中が寒くて、齒がカチカチと音を立てて、ただ体を丸めて震えているだけだ。

「あー、寒いよな」

春輝は制服のブレザーを脱ぐと、わたしの肩にふわっとかけてくれた。その瞬間、氷のように冷え切っていた体がじんわりとあたたかくなった気がして、さらに困惑した。

生きていても仕方ないわたしなんかには、どうしてこんなこと……

「ごめん。そんなのしかなくて」

春輝がわたしの隣に腰を下ろす。

わたしは戸惑いながら、肩にかかったブレザーを震える指先で押さえ、ぼつりとつぶやいた。

「……怒らないの？」

「なんで？」

なんでって……こんなことをしている人がいたら、普通はきっと怒る。けれど、見上げた春輝の表情はいつもの笑みと変わらなかった。

「おれが怒る理由なんてないじゃん」

わたしはさらに背中を丸めてうつむき、消えそうな声でつぶやく。

「っていうか、どうして……ここにいたの？」

「え、どうしてって」

春輝は不思議そうな声を出したあと、わたしのほうを見て言った。

「『一緒に帰ろう』って言ったのに、全然帰る感じじゃなかったし。しかもいつのまにか靴箱から靴なくなってるし。ずっと捜してたんだよ。そしたら自転車走っていきのくが見えて、急いでチャリで追いかけて……でも途中で見失っちゃってさ。それで

も捜し回って、芹澤さんの自転車を見つけたんだ」

「なんで……」

思わず顔を上げて、春輝を見た。

「なんでそこまでするの？ わたしなんかのために」

出会ったときから言っていた。春輝はわたしを捜していたと。わたしに会えてよかったと。

その理由をはっきり聞かずにここまで来てしまった。

春輝は穏やかな顔でわたしを見ていた。その頬にオレンジ色の夕陽が当たってキラキラ輝く。それがすごく綺麗で……

「芹澤さん、泣かないで」

「……泣いてない」

手の甲でぐいっと目元をこする。

嘘だ。わたしは泣いていた。

春輝の顔があまりにも綺麗で、それを見て泣いていた。

目に海水が染みて、ジワリと痛みが走る。それでも無理やり目をこすっていると、

静かに春輝が言った。

「おれさ、中学のころ、芹澤さんに助けられたんだよ」

「……え」

ぼつりと漏らしたわたしの隣で、春輝が目を細めた。それから昔を思い出すみたい  
に少しだけ顎を上げて、つぶやく。

「この神社の上にある空き地でさ。ガラの悪いやつらが数人、喧嘩してたの覚えてない？」

わたしは春輝の顔を見ながら、記憶を巻き戻す。

中学のころ、お母さんが亡くなる前まで、わたしはこの近所に住んでいた。だからこの道はよく通っていて……ああ、そういえば、空き地でもめている男の子たちを見かけたことがある。

立ち止まってよく見たら、ひとりや二人で殴ったり蹴ったりしているみたいで。見かねたわたしは倒れている男の子の前に、両手を広げて立ちほだかったんだ——

「思い出した？」

その声にハッとして、春輝の顔をじっと見る。

あの日、周囲は薄暗くて。だから男の子たちの顔なんてよく見えなくて。

「もしかして……あのときホコボコにされたの、春輝だったの？」

「当たり前！」

あははっと春輝がおかしそうに笑う。

まったく気づかなかった。薄暗かったこともあるけど、男の子たちはやってるほうもやられてるほうも、ガラが悪い不良みたいな子たちだったから。

明るくてキラキラしている、いまの春輝とはイメージが違いすぎる。

「よくあの中に入ってこれたね。怖くなかったの？」

春輝の声にわたしは答える。

「だ、だって腹が立ったから。ひとりを大勢でいじめるなんて」

「いじめられてたんじゃないよ。喧嘩を売ったのはおれのほうなんだから」

ぼかんと口を開けて春輝を見る。

春輝は笑ってわたしに言う。

「なんで止めたりしたのかなあ。あのままやられてたら、おれ、死ねたかもしれないのに」

「え……」

死ねた？

まるで死にたかったというような言葉に呼吸が止まる。

わたしにもう一度笑顔を見せてから、春輝は海の彼方に視線を向けてつぶやいた。

「殺してほしかったんだよ。だから強くてヤバそうなやつらに、わざと喧嘩を売った」

わたしは呆然と春輝の横顔を見つめた。

強い風が海から吹いて、春輝の柔らかな髪を揺らす。

「まったく、芹澤さんのせいでおれの計画はめちゃくちゃ。死ぬこともできずに、こ  
うやっていまも生きてる」

ドキッとした。

わたしは死ぬ直前に後悔した。でも、春輝はそうではなかったかもしれない。

死ぬのを邪魔された春輝は、どう思ってるんだろう？ どうして、そんなわたしを  
ずっと追いかけていたんだろう。

もしかして……よっぽどわたしを恨んでる？

そう思っただけで春輝を見つめると、視線を海からわたしに戻し、にかっと笑った。

「でも今日は、その仕返しができてよかった。芹澤さん、死にたかったんでしょ？ おれに止められて残念だったね」

冗談めかした言い方に少しだけほっとして、それからむっと唇をとがらせる。春輝は満足そうに笑っている。

「まあ、これでおあいこってことで。おれ、芹澤さんに助けられて、仕方なく生きることにしたからさ。芹澤さんも、仕方なく生きることになよ」

顔をそむけて、前を向く。

どこまで本気で言っているんだろう。わからない。

目の前に夕暮れの海が見えた。水平線に夕陽が沈みかけ、あたりがオレンジ色に包まれはじめ。

波も、海岸も、鳥居も、春輝も、わたしも――

……だけど、恨まれてたわけじゃないみたい。

そう感じたら、なんだか胸がいつぱいになった。

わたしはたまったものを吐き出すように声を出す。

「わたしのお母さん……若いころちょっとだけ芸能界にいたの。全然売れなかった

けど」

隣から声は聞こえない。わたしは続ける。

「たぶん、中途半端に終わった夢があきらめきれなくて、わたしを代わりにしようとしてたんだと思う。お金かかるのに、ピアノもバレエも習わせてくれたし、口ぐせみたいに『奈央の笑顔は可愛いよ』『ママに似て綺麗だよ』って言ってた」

こんなこと、誰にも話したことない。

それなのに、どうして春輝になんか話しているんだろう。

「わたしにはお父さんがいなくて……でもお母さんはお父さんのこと、ずっと忘れられないみたいで、神様にすがってばかりいたの。わたしはそんなお母さんを見るのが嫌だったし、お母さんの代わりにさせられるのもすごく嫌だった。でもお母さんにはわたししかいないから……ずっと支えてきたつもり」

胸が苦しくなって、一回深く息を吐く。それでもまた、苦しさを吐き出すように続ける。

「そんなお母さんも病気で亡くなって……張りつめていたものが、切れちゃったっていうか……もうわたしなんか、この世界に必要なんじゃないかなんて思ってた……」

「うん」

春輝がうなずいてくれた。わたしの背中に、春輝のあたたかい手がそっと触れる。それがなんだかすごく安心できて……わたしはまた口を開く。

「わたしいま、親戚の家で暮らしてるの。叔父さんと叔母さんには感謝してる。自分たちの子どももいってお金がかかるのに、わたしを引き取ってくれて、高校にも行かせてくれて……」

話しはじめたら、もう止まらなくなった。

「でも叔母さんは、わたしが制服を買ったり学用品を買ったりするたびに嫌味を言うから、正直きつくて……高校には行かなくていいって言ったなら『そんなことしたらわたしたちが、あんたを高校に行かせてやらないみたいじゃない！』って怒って……」

春輝の手が、子どもをあやすかのように背中を撫でてくれる。

「夕食もね、『あんたのせいで、ひとり分多く作らなきゃいけないようになった』って毎回言われるの。だからわたしのご飯は作らなくていいですって言ったんだ。そしたら『わたしの食事が不満だって言うの？』って、また怒らせちゃって。結局『勝手にしなさい』ってお金をくれるようになったから、毎日コンビニで買ってひとりで食べ

てる」

叔父さんと叔母さんがいなければ、わたしは生きていけなかった。それは間違いない。だから嫌なことも我慢して、自分の心を殺して生活していたけれど……もう限界だった。

「一緒に住んでる従妹いとこには『奈央ちゃん、ママにおこづかいもらっていいなあ、好きなもの食べ放題じゃん。うらやましい』なんて言われて。うらやましいならわたしと代わってよ……！ お父さんもお母さんもないわたしと代わって……！」

涙をこらえて、前を見つめる。

夕陽が海の向こうに沈んでいく。あたりがゆっくりと暗くなっていく。

ひゆう、と風が吹いて、寒さが肌に沁み込んでくると同時にハツとした。

なんでこんなこと言ってしまったんだろう。

「……他には？」

呆然としているわたしの耳に、春輝の声が聞こえた。

「言いたいことあるなら、全部言っちゃえよ。おれ、いくらでも聞いてやるから」

「……ほんと？」

いつもの明るくて楽しそうな声とは違って、少しだけ低くて穏やかな声に、ついそ  
う聞き返してしまふ。

わたしの背中を、春輝の手が撫でる。顔を横に向けると、春輝は見たこともないよ  
うな柔らかい笑顔で、でも目だけは真面目に光らせて言った。

「うん。……その代わり死なないで。芹澤さんが死んだら、おれも死ぬから」

「な、なんで？」

自分が死んだら、春輝も死ぬ。だから死ぬな、なんて。

そんなことを突然言われたら困ってしまう。目をしばたかせると、春輝が頬を搔  
いた。

「おれ、映画を撮ろうと思って」

「映画？」

また突拍子もないことを言われて聞き返す。すると春輝は唇をちよつと悪戯っぽく  
吊り上げて微笑んだ。

「うん。もちろん主演は芹澤さんで」

「は？」

口を開けたまま固まったわたしを見て、春輝が声を立てて笑う。

「主演に死なれたら、おれ、生きてる意味ないんだよ。主演は芹澤さんって、もう決  
めたし」

「決めたって……勝手に決めないでよね！」

「いや、もう決めてるの。はじめて芹澤さんに会ったときから」

はじめて会ったとき？

「おれの前に立ちはだかつてくれた芹澤さんの背中、すっごいかっこよかった。でも  
少し震えてるところが、なんか放っておけなくて。そんであいつらを追い払ったあと、  
安心したようにおれに見せてくれた笑顔がめっちゃ可愛くて……ひとめぼれだった」  
かあつと、顔が熱くなる。

「そのとき思ったんだ。どうせ生きなきゃいけないなら、この子の映画を撮ろうって」

「ひ、飛躍しすぎじゃない？」

噴き出すように笑って、春輝が続ける。

「でもそれきり、芹澤さんには会えなくてさあ。おれ必死に捜したんだよ。友達の方  
てを頼って、やっと中学がわかったと思ったら転校してるし。そのあと執念で捜し

まくった」

「……捜しまくったってそういうこと？」

「怖いんだけど」

眉をひそめて言い返すと、春輝があははっと明るく笑う。

「それだけおれが、芹澤さんに惚れてるってこと。わかってくれたかなあ？」

「わかるわけないでしょ。そんなのただのストーカーじゃん」

立ち上がると、わたしの体から水を吸ってしまったブレザーを春輝に押しつけた。

「これ、ありがとう。もう大丈夫だから」

「帰るの？」

「……帰る」

スカートはまだ乾いてなくて重たいし、ローファーからは水がしみ出してくる。

帰る場所なんてないけれど、帰るしかないんだ。

じやりっと足元の石を払ってから、重い足を踏み出す。

そんなわたしの背中に声がかかった。

「奈央！」

はじめて名前を呼ばれた。びくっと肩を震わせ立ち止まる。

「おれとつきあって」

その声が耳を震わせ、胸の奥に染みていく。

「つきあってよ、おれと」

ごくんと唾を飲み込んでから、ゆっくりと振り返る。

まっすぐ届く春輝の視線と、わたしの視線がぶつかり合う。

「……でしょ」

「え？」

「つきあうわけないでしょ！」

叫んで石の上を急いで歩く。階段を駆け上り、自転車にまたがり、思いつきりペダルを踏み込む。

空き地には、春輝の自転車がぼつんと止めてあった。あたりはもう薄暗い。

春輝はわたしのあとを、追いかけてはこなかった。

## 第二章 笑顔にしてみせるから

「叔母さん、行ってきます」

翌朝、キッチンに立つ叔母さんの背中に声をかける。反応はない。『わたしのご飯は作らなくていいです』と言ってから、ずっと機嫌が悪いのだ。

叔父さんは気配を消すように、いつも通り、ダイニングテーブルで食事をしていた。わたしに対しても、叔母さんに対しても、叔父さんは口を出さない。というより、面倒なことに関わりたくないのだろう。昨日だって、いつもよりずっと遅く、スカートがべしょべしょの状態で帰ったけれども言われなかった。

キッチンから出て、玄関へ向かう。

きつとあんなこと、言うべきではなかったんだ。叔母さんの作ってくれた料理をありがたく食べて、従妹の恵麻のおしゃべりに微笑んでいればよかったんだ。

「まったく可愛げがないんだから」

キッチンから漏れた叔母さんの愚痴が、わたしへのものだとわかっている。

「あ、奈央ちゃん、もう行くの？」

セーラー服を着た恵麻と、玄関の近くでばったり会った。一歳違いの恵麻は、近所の中学校に通っている。

「うん。学校遠いから、もう出ないと」

「大変だねえ。わたしだったらあんな高校、絶対行かないけどな」

わたしは恵麻の前で苦笑いをする。  
家から遠くて、交通の便が悪い高校を選んだのはわたしだ。お母さんが亡くなってから転校してきた中学では、周りと同染むことができなかつたし、その前に通っていた中学でも、いい思い出なんかひとつもない。

だから高校は、できるだけ知っている人がいないところに行きたかつたんだ。

そんなことを考えていたら、恵麻の手がすつと伸びて、わたしの長い黒髪に触れた。  
「いいなあ、奈央ちゃんの髪、まっすぐで。うらやましい」

恵麻の髪はくせ毛で、毎朝必死にヘアアイロンで伸ばしている。

「この髪、伯母さんに似たのかな？ 奈央ちゃんのお母さんも、すごく綺麗な髪だっ

たもんね」

わたしはなにも言わず、当たり前障りのない笑顔を見せる。

「それに伯母さん、めっちゃ美人だったよね。若いころスカウトされて、映画に出たことあるんでしょ？ ママが言ってたよ」

恵麻はちょっと周りを見まわしてから、わたしの耳元に顔を近づけ、ささやいてくる。

「ママってね、奈央ちゃんのお母さんがうらやましかったみたい。ママも演劇とかやってたけど、プロにはなれなかったから」

その話は聞いたことがあった。叔母さんは勝手にわたしのお母さんをライバル視していたって。それにお母さんは芸能界に入るために家出同然で実家を出ていったから、亡くなった祖父母やお母さんの弟である叔父さんにもよく思われていないんだ。

だからわたしなんて引き取りたくなかっただろうけど、姪のわたしを放っておくことはできず、渋谷家に置いてくれたと聞いている。

「恵麻、そんなところでなにやってるの？」

キッチンから叔母さんが顔を出し、わたしがいることに気づくと表情を曇らせた。

「あんた、まだいたの？」

わたしは急いで靴を履き、もう一度「行ってきます」と言って外へ出る。

誰からも「行ってらっしゃい」という言葉は、返ってこないけど。

自転車をこいで学校に向かう。

すると途中の交差点に、自転車で乗っている見覚えのある男子生徒の姿が見えた。

「あ、奈央！ おはよー」

わたしは顔をしかめる。ゆっくりと自転車で近づくと、明るい声で春輝が言った。

「よかった。死んでなくて」

「……なんでここにいるの？」

「迎えにきたんだよ。おれの彼女のこと」

「は？ 彼女？」

思わず声を上げてしまった。

「わたしつきあうなんて、一言も言ってないけど？」

「え、あ、そうなの？」

「昨日ちゃんとやったでしょ！『つきあうわけない』って！」

「聞こえなかったなあ。風強かったし」

こいつ……絶対ふざけてる。

昨日は気になって、眠れなかったのに。

わたしのせいで冷たい海に入らせちゃって、風邪ひかなかったかなとか。『つきあうわけないでしょ！』なんてきつく言っちゃって、悪かったなとか。

信号が青になる。わたしは春輝をにらんで、きつぱりと言った。

「いい？ 学校では絶対、わたしに馴れ馴れしくしないでよ」

「え？」

「馴れ馴れしく声かけたり、写真撮ったりしたら、二度と口きかないから」

「えー、それ、ひどくね？」

「ひどくない。だってわたし春輝のせいで、昨日美鈴たちに……」

言いかけてやめた。別に春輝のせいってわけじゃない。

顔をそむけ、ペダルを踏み込もうとしたら腕をつかまれた。

「じゃあ、誰もいないところで話そう？」

わたしはブレーキをかけ、春輝を見る。

「今日の放課後、あの海の鳥居のところで待ってる」

「え……」

春輝はにかつと笑うと、わたしから手を離し、自転車走り出す。

「あ、ちよつ……」

呼び止めようとして、口を閉じる。

知らない、あんなやつ。

『今日の放課後、あの海の鳥居のところで待ってる』

あいつが来るなら海なんて、絶対行かないんだから。

その日、わたしに言われたとおり、春輝は一度も声をかけてこなかった。もちろん写真撮ったりもしない。

だからわたしは、ほとんど誰とも話さずに一日過ごした。それはわたしがずっと、望んでいたことなだけだ。

ちらっと視線を動かすと、おしゃれな女の子や、活発な男の子たちと笑っている春